

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子 絵画修復家

台風一過、相変わらず日中の日差しは暑いけど、夕方はさすがに秋の風が吹いています。

台風が通り過ぎる間、あまりの激しさに起きて夜中の2時にニュースを見たら、実況中継で「台風は今、鎌倉に上陸しました！」と言ったのでビックリしてしま

った。まあ、去年も台風は2度ほど鎌倉や江ノ島あたりから上陸したことがあったのですが、今回の台風は、3時の実況中継では「現在は葉山付近を通過中」なんて言っていたので本当に湘南地方をゆっく

りお散歩するのが好きだったらしい。この8月は、大きな地震もあったし、アルカイダは今度のターゲットは東京だと言

っているらしいし、なにやら不穏な予感

を孕む今日この頃です。選挙の投票日まで私たちは無事で居られるでしょうか、

コイズミサン！？ さて……このコラムについて時々「よくネタ切れにならないね。」と言われる

んですけれども、基本的にはたぶん慢性的なネタ切れ状態で、締め切り当日若しくは過ぎちゃって数日あたりに彷彿とア

タマに浮かんできたよなしごとを書いて

います。だから、常に編集者泣かせ、

掟破りな私です……。修復とか画材関係に限定して書くのは、やはり結構むつか

しい。もし、何でも書いていいって事な

らもつとバカな事一杯書いてやうんだけ

どなあ。しかし、私の周りには幸運な事に仕事柄でしようか、とてもパラエティーに富

んだ人、作品、その他もろもろな事が毎

月向こうからこつちによつて来るので、

ナントカなっているのです。そうそう、この夏もアトリエの中はやはり大変パラエティーに富んでいました。

……。通行人に1000円で入場料貰つて

見せたいくらい。でもネ、こういう時の私はかなり神経質になって閉じこもつ

て仕事をするので、いつもと違って真面目な本場にネタ切れのヒトとなるのです

ヨ！ つか、美術館の学芸員さんに「ひえー、加賀さんって血液型B型のの、

う質問があります。実は、修復家になるためには、「失敗をしない」という訓練が最も重くあつた

気がします。修復手順を、いかに絵にイメージを与えない方法で進めるか、とい

うことを見習い期間にかなりじっくりと

考えてレポートさせられたし、いつしか

瞬時にそういう予防的手順を踏む訓練によつて鍛えられて、プロになる事が出来

たのです。思うに、私が修復の勉強を止めなかつたのは、この様な訓練を自分に課するべきだと、とても強く思つてきた

からかもしれない。だって、私は本当にとんでもなくドジで間抜けな子供だったから！ 劣等感のカタマリは私は、そ

んな自分を愛えたいと青春時代を通してずつと思つてきたのです。

昔、日本で独立して初めて仕事をした

時の事。あの時は、ビュッフエを預かつてたんだっけ。薬品をつけた綿棒を作品

のホンの端につけるだけで、すでに10年も修復をやつてきていたのに、全くの一人ぼっちで仕事をする初めての体験にひ

どく緊張し、何度も深呼吸をして、腕を上げて振ったり、腰を振つてみたりした。きつと外から影絵のように見えていたら、

みんな私が踊っているのだと思つた事でしょう。

感謝すべき事に、その時から現在まで、まだ一度も「失敗だつた」と思つた事は

ありません。もし、失敗をしたら、それが誰にも判らない些細な失敗でも、それ

は自分が修復をやめる時なんだろうなと思つています。(あと老眼になつた時には

は、きつと私の精神状態を不安なものにしてしまう。それ程、世界にたつた一枚

しかない絵を直すことは恐ろしい。巷でよく、見様見真似で絵を洗つていたり、

だと思つていたら、話している事はかなりオモロい。話のお題に、最近あつた恥

ずかしいこと、というテーマで話さなくてはならなくなつた。一人のご主人は、

傍らの妻を指して「この人、最近へ生首

だーッ」と叫んでよく起きるんですよ。」と言つたところ、すかさずその妻、

「あらあ、あなたなんか私がこの間ブーッておならをしたら地震だ！ っつて飛び起きたじゃない！」それより可笑しかつた

のは、「僕の妻は、恥ずかしいんです、この間かよつてゐる耳鼻科の医者に付き添つていつたら、先生に「調子はどうですか？」と聞かれてこの人、(あのー、私結構面倒見はいい方です)。つて答え

たんだ。(長所はどこですか？と聞かれたと思つたのね)。そしたら先生、し

ら

ら

ら

ら

ら

1つとした顔して、アー、もう鼻は治つて

るみたいね、じゃ、帰つていいですつて言つたんだ。」ひとしきり笑つた後、

じゃ、加賀さんの最近あつた恥ずかしい

事は？と聞かれ、ハタと困つた。無い。全然、無い。だって、私、このところ修

復しつばなしだつたんだもん。育児↓仕事↓育児↓寝る、だけの恐ろしく単調な日々。その時は本当に何も話すネタが見

当たらなかつた。で、この誌面では、ネタが無い時のウラザ、過去にあつたウルトラ級に恥ずかしかつた話を連載で(だつて沢山あるんだもん！)お話しします。じゃ、今日は恥ずかしかつた話その1ね。本当にすごいよ。

ちては大変と、師匠は私の体に命綱の口

ープを結んでくれていました。それと

うのも私を含めて他の相棒達も、板を渡

しただけの足場に座つて30センチ向こう

の、つるつるした絵の描かれた壁に手を伸ばして薬品をつけた脱脂綿で洗浄をし

ていたのですが、みんなしよつちゆう道具を落としたり、靴を落としたり、状態

がグラつとなつたり、危なかつたか

のです。中でも私はたつた一人チビの女の子で、今より体重がキログラムも少

ない、38キロのやせっぽちだつたもので

すから、他のごつい体格の男性達は挟まるだけかもしれないけど、30センチの壁

の隙間は私はすんと落ちてしまひそうで、ついでにまだまだドジなキャラクタ

ーを引きつづけていたので、私にだけは口

い。……

その日、寺院は朝から慌しかつた。朝、

神父様がにごやかにやつてきて私にボン

ジュール、今日はお葬式があるのででき

るだけ静かに作業をするように皆さんに

伝えてくださいと言つた。昼過ぎ、お葬

式は始まつた。下町の小さな寺院のお葬

式は少しなんだか変わったやり方で進行

した。真冬だったので、寺院の中は大変

寒く、着膨れ状態の私に高い足場から落

した。鐘楼で鐘が鳴ると扉が開いてし

ずと数名の人が棺を担いで入場してきた。

座席には、数十名の黒い喪服を着た人達

が列席している。棺が入つてくると、そ

れまでつつかえつつかえ鳴つていたオル

ガンの音が止み、ついで唐突に祭壇にす

つくと立つて、トランペットを一人のお

じいさんが真つ赤な顔をして吹き出した。

旋律は哀調を帯びているが、これがもう

可哀想なくらい下手で、下から相方が水

の入つたブリキのバケツをそうつと渡し

てくれるのを受けとりながら、私達は思

わず不謹慎な笑いが漏れそうになるのを

堪えていました。と、その時、100キ

ロの巨体をもつ私の師匠が不機嫌そう

な顔を

して

ぶつぶつ言いながら戻つてき

ました。何でも、足場を組む労働者達と喧

嘩をしたそう。私達の仕事つぶりを見よ

うと上の方にぐんぐん登つてきました。

言つてくれなくなつち

やつた。私が悪いんじや

ないんだけど……。

次号も、私の失敗談

（と言うか、不幸話？）

乗つていた足場の、対極のパイプの無い

ところ

に

まだまだ続きます。乞う

ご期待。

ガタン！と言う大きな板の音。バシヤ、

ガラガラガラーン(転がるブリキのバケ

ツの音)、キーキー……(空中中で

吊りになつてゐる私の音)あまりの事に

ピタツとトランペットの音が鳴り止み

ました。喪服の人たちは全員お口あんぐり。

着膨れした私はロープに吊られてまるで

ミノムシのよう。

揺れる私の足の下には花を飾つた黒い

棺。だつて私の命綱つて、一番丈夫な天

蓋から出ていた丸い輪に通されてたんだ

かがゆきこ●絵画修復家、大学

卒業後、絵画の古典技法を学ぶ

ためにパリに留学。ルーブル美

術館の絵画修復員を経て、現在

は調剤で修復工房を主宰。

は調剤で修復工房を主宰。



息子のカシ米尔君を抱く師匠のクリストフ。



ルーブルで働き出した当時の私。体重なんと38キロ！